

令和五年度 山梨大学教育学部学校教育課程 幼小発達教育コース  
学校推薦型選抜Ⅰ（教科別推薦入試） 試験問題 表紙

小論文

注意事項

- 試験開始の合図があったら、すぐに用紙の種類と枚数を確認し、受験番号記入欄の全てに受験番号を記入して下さい。

表紙	………	1枚
問題用紙	………	1枚
答案用紙	………	1枚
- 試験終了後、全ての用紙を回収します。
- 用紙が不足していたときや、印刷が不鮮明な場合には手を挙げて監督者に知らせて下さい。

この用紙（表紙）の裏面を「下書き用紙」として使用してかまいません。  
下書きは採点には含めません。

受験番号

## 小論文

受験番号

次の文章を読んで、あとの【問】に答えなさい。

子どもが学校で身につけた力は、どこでどのように使われるのか

学校で身につける力の多くは、「たったいま」ではなく、「将来」必要になる力として位置づけられている。つまり、おとなになって職を得て、お金を稼ぐために、一定の能力・技能・知識を身につけていなければならない。それが小学校、中学校、高校、大学、大学院という学校システムの上に順次積み上げられる。そうして「将来」に照準を合わせたところで必要になる力が、節目節目で、どこまで身についたか、試験で確かめられる。

こここのところで力と生活との間に、ある倒錯が忍び込む。たとえば現代の国際化社会を生き抜くためには英語での読み書き、会話くらいはできなければということで、中学校から英語教育がなされ、これが中等教育の重要な位置を占めてきた。いまはさらに小学校段階で英語に慣れ親しむ機会を持ち込むようになっている。そうして子どもたちが、「将来」必要になる大事な力として熱心に英語を学ぶ。ところが十年ほどもそうした学習を重ねたあげく、いよいよ問題のその将来になってみれば、この力を生活のなかで使いこなせるおとなは、数えるほどしかない。それもそのはず、いくら将来のためと言って身につけたつもりでいても、その力は試験に使うだけ、生活のなかで使われることがない。生活のなかで使われない力が、生活に根を下ろすはずがない。

リハビリの世界で「廃用の原則」として言われるとおり、使われない力は衰える。教室でただ身につけて試験で発揮しただけの力は、その試験という「用」が終わったところで、ただちに剥はがれ落ちる。じっさい高校入試、大学入試で膨大な量の知識・技能を覚えたはずなのに、それが終わって一年もすれば、その大半が身から剥落はくらくしているのに気づく。

この倒錯は、私たちにとつてあまりにお馴染みで、これをもはや倒錯とさえ意識しなくなっている。しかし制度の枠のなかで正当化されてはいても、なお倒錯であることに違いはない。現に子どもたちの多くは、学校も学年が上がるにつれて、そこで身につけた力が自分たちのいまの生活世界に生かされていくという実感から遠ざかり、そのかわりに将来へとつながる学校制度の梯子はしこを意識して、そこをのぼるためには、自分たちのいまの生活をいったん横において、とにかく学ばざるをえないのだと観念していく。

昨今の学力論争で議論されている「基礎学力」や「生きる力」が、はたして身につけた力をいまの生活世界に組み込んで、その子どもの世界を豊かにするものになっているのか、むしろ「将来」のためと言いつつ、結局は子どもたちを制度の梯子に押し込み、空しい学びを強いるだけのものになっていないか。ここに学びにかかわる深刻な錯覚が入り込んでいることを再考せずして、ただただ学力を身につけられるよう支援すればよいなどというものではない。

（出典・浜田寿美男『子ども学序説…変わる子ども、変わらぬ子ども』二〇〇九）

【問】著者のいう「倒錯」とは、何かを説明しなさい。また、下線部にあるような実感と結びつくような学びとはどのようなものか、具体例をあげてあなたの考えを論じなさい。字数は、六〇〇字以上 一〇〇〇字以内とする。

